

物と記号

飯田 隆

2021年10月

1

私よりも一世代前に学生として大森荘蔵の授業に出ていた奥雅博氏から聞いた話で、よくひとにも話すものがある。それは、哲学の問題をぜんぶ解決してガソリンスタンドを経営すると、大森が授業でよく言っていたという話である。かれは無類の車好きであったから、ガソリンスタンドというのは領けないでもない。しかし、「哲学の問題をぜんぶ解決して」というのには、おどろくと同時に、一瞬自分の身を振り返って反省もした。どんな哲学の問題であろうが、それが解決されたという事態を想像することさえしない自分に気付いたからである。

数学や自然科学の問題と違って、哲学の問題というのは、たがいに緊密に結びついているから、ひとつの問題だけを解決するというわけには行かず、解決するならばぜんぶ解決しなければならない。だから、哲学の問題を本気で解決しようと思うならば、哲学の問題をぜんぶ解決するという覚悟が必要である。

大森の発言の背景に、『論理哲学論考』のウィトゲンシュタインと、過去の哲学を全否定した論理実証主義の影響をみることは、たぶん間違いではないだろう。また、こうした影響が六〇年代が進むにつれて大森のなかで薄れていったこともたしかだろう。そのせいかどうか知らないが、私が大森の授業を受けた頃にはもう「哲学の問題をぜんぶ解決して」という文句を耳にすることはなかった。

それでも、大森が本気で哲学の問題を解決しようとしているということは私たち学生にも伝わった。それは、まるで他人事であるかのように哲学の問題を論じるひとへの不信感を私たちに植え付けた。しかし、いくら本気で取り組んでいようが、それなりの進展が目に見えるのでなくては、ついて行こうという気もそがれる。だからこそ、解決したとはっきり言うことこそなかったが、解決したという自信を大森がもっている問題があったことは重要だった。知覚をめぐる哲学的問題がそれである。

2

いま「知覚の哲学」と言っても、これこそが哲学の中心問題だと思うひとは、あまりいないだろう。だが、私が学生だった頃、というのは今から半世紀も前のことだが、私たちはバーや居酒屋で、テーブル上のビール瓶を眺みながら、ビール瓶が見えているというのはどういうことなのかとか、見えているビール瓶とは、われわれがいなくとも存在するものなのだろうか、それとも、われわれの心なしには存在しないものなのかといった事柄を盛んに議論していた。

知覚、より正確には感覚的知覚が、これほど頻繁に論じられていた理由は、たぶん二つあると思われる。

第一に、哲学のなかでもっとも基本的な問題とは、認識の問題であるというデカルト以来の枠組みがまだ強固に残っていたことが挙げられる。もちろん、『論理哲学論考』のウィトゲンシュタインだけでなく、『哲学探究』のウィトゲンシュタインも、大森をはじめとする何人かの哲学者には知られていたし、言語の問題が哲学にとって基本的な重要性をもつと確信していた哲学者もいたが、一般に言語論的転回はまだ日本の哲学に来ていなかったというのが事実である。したがって、こうした議論は、私のまわりだけでなく、哲学を他人事だとは思わない人々のあいだでは日常的に交わされていただろう。

これに対して、第二の理由は、私が当時いた環境から来ている。当時「科学哲学」という名のもとに、日本の哲学のなかでは半ば軽蔑的に遇されていた哲学者たち—大森はその中に含まれる—にとって共通の問題は、われわれが自身の五感を通じて知る世界と、自然科学によって描かれる世界との関係ということにあった。今になって思うと、これは別に、「科学哲学」なるものが現れて初めて意識された問題ではなく、近代科学の成立とともに近代の哲学の中でずっと議論されてきた問題である。このことは、カントを思い出すだけで十分であったはずである。それにもかかわらず、カントに詳しいはずの学者ではなく、カントなどほとんど知らない「科学哲学者」が、こうした問題に取り組んだのは、カントにとっての問題はちゃんとした「哲学者」には他人事だったからだろう。

いずれにせよ、五感を通じて知られる世界と、自然科学が描く世界との関係を明らかにしたいという関心は、大森の最初の論文集『言語・知覚・世界』（一九七一年）のハイライトと言うべき論文「物と知覚」に明瞭に見て取れる。また、そこに、日本の哲学における言語論的転回の始まりをみることもできよう。この論文で大森は、物言語と知覚像語という二つの言語のあいだの関係として、二つの世界のあいだの関係を論じているからである。また、言語論的転回について大森が自覚的であったことは、『言語・知覚・世界』の「序」から明きらかである。そこでかれは、自身の「言語的アプローチ」を強調している¹。

¹ 『大森荘蔵著作集 第三巻 言語・知覚・世界』一九九八年、岩波書店、七頁。「物と知覚」の

しかし、物言語と知覚像語という考え方は長続きしなかった。「言語的アプローチ」に変わりはないが、『言語・知覚・世界』のわずか五年後の『物と心』（一九七六年）で、それは、単一の言語の中での二つの語り方、物について語る語り方と知覚について語る語り方とに、取って代わられる。二つの言語から二つの語り方への移行を可能としたのは、知覚には常に「見え」と「思い」が含まれているという大森の「発見」である。

3

「物と知覚」での大森の目標は、日常言語のなかにいりまじっている—あるいは、重ね合わされている—物言語と知覚像語という「二つの言語を引き離して析出し、そしてこの析出された二つの言語の関係を明確にすること」（『著作集 第三巻』、一六六頁）である。この目標をめざしてなされる大森の議論は、独創的な着想と豊富な例に満ち、きわめてスリリングなものであるが、ここでは結論に直接向かうことにしよう。それは、次の二点にまとめられよう（同、二三四頁）。

- (1) 「物」についての話は、知覚像についての話にはほかならない。よって、物言語は知覚像語に「還元」できる。
- (2) しかし、「物」について話すためには、知覚像の無限集合を語らねばならず、そのためには「物」が不可欠である。よって、物言語は消去不可能である。

しかし、一九七三年に発表された「ことだま論」以降、こうした結論を可能としていた枠組み自体が考え直されることになる。知覚に関連するもっとも大きな変化は、知覚像なるものが廃棄されたことである。これは、知覚、想像、記憶、期待といった心的態度において、われわれは、表象といった中間物を通じることなしに、物やことと直接にかかわるといふ一般的テーゼ—物やことは、われわれにじかに立ち現れる—からの帰結である。

知覚像なるものが存在しない以上、知覚像語も存在しない。よって、物言語と知覚像語の関係を通じて、知覚の問題を論じるという方法はもはや使えない。その代わりに大森がとるのは、われわれの知覚がどのようなものであるかを「記述する」という方法である。哲学の議論とは、論証や証明といった形をとっていても、煎じ詰めるどころ記述であるというのは、大森の持論

中でも次のように書いている。「ある範囲の、そしてある種の、哲学問題を言語の問題としてみるとき、その解決ができるというのではなく、その問題の構造が夾雑物のない明確な姿であられる。このことを信じ、それを具体的に、そして意識的に実行しようとしたのが論理実証主義あるいは分析哲学であった。このことと経験主義の二つが、これらの哲学の基本的性格であるとわたくしには思われる。そしてまた、このいわゆる言語主義がこれらの哲学の最大の功績であるといえよう」（同、二〇五頁）。以下でも、大森からの引用は、『著作集』による。

である（たとえば、『著作集 第四巻』、二〇頁）²。

この方法が成功するかどうかは、得られる記述がどれだけ説得的であるかによる。大森の記述が説得的であることは、多くのひとが認めるのではないかと私は思う。ただし、大森の記述の説得性の大きな部分は、ひとによっては「レトリックにすぎない」とも言われかねない要因に由来している。すなわち、選ばれた例の印象深さ、描写に使われる言い回しの適切さ、さらには、記述の全体を通じて何となく漂う上機嫌なユーモアといったものである。こうした要因は、大森の哲学的「散文」の大きな魅力を形作っているのだが、それが逆に、大森の哲学を正当に評価する妨げになっているという気も、私にはする。

したがって、大森の記述が事柄を正しく捉えていると確信するためには、かれの文章のもつレトリックの魅力を差し引く必要がある。そうしてもまだ残る大森の記述の説得性は、主に次の二つから来る。第一に、そこに、われわれの知覚経験を、その構成要素にまで分節化された全体として再認できることであり、第二に、それがさまざまな種類の知覚についても通用すると予想できることである。

大森が考察しているのは、もっぱら物体の知覚である³。大森流のレトリックをできるだけ排して、物体の知覚についてかれが述べているところを要約すれば、次のようになろう。

- (i) 物体の知覚は常に、ある特定の視点（パースペクティブ）からのものである。よって、時点 t において物体 X を知覚するときには必ず、知覚されている部分と、知覚されていない部分の両方がある。 t において知覚されている X の部分を「 t における X の見え」と呼ぶ。
- (ii) t において知覚されていない X の部分は、 t で「思われ」ている。 t において知覚されていない X の部分の思いを伴わなければ、 t における X の知覚は成立しない。「見え」は常に「思い」を伴う。
- (iii) t における X の知覚に伴われる「思い」は、「知覚的思い」である。すなわち、 t において知覚されていない X の部分を t において知覚するという反事実的想像である。

ここからは、物体というものが、物体の「見え」から構成されるものではなく、そうした「見え」の各々が、同じ物体の別の視点からの「見え」の「思い」を伴わなければならないゆえに、物体の観念は物体の知覚にとっての、

²この背景には、論理的演繹とは言い換えにほかならないという、初期から晩年に至るまで一貫している大森の主張がある。こうした主張は、われわれの認識活動において演繹が果たす役割を正しくとらえていないという点で間違っていると、私はかつて論じた。次を参照されたい。飯田隆「演繹と換言」、野家啓一編『哲学の迷路』（一九八四年、産業図書）所収。

³物体の知覚についての大森の記述は、『物と心』に収められた二つの論文「三つの比喩」「虚想の公認を求めて」にある。以下では主に後者によった。

いわばアプリアリであることが帰結する。この帰結は、「物と知覚」で、物言語が知覚像語に「還元」できるにもかかわらず、知覚像の無限集合を束ねるためには「物」が不可欠であり、物言語は消去不可能であると結論されていたことを思い出させる。ただし、ここではもはや知覚像は登場せず、その代わりに、「物」が知覚的に立ち現れるだけであり、そうした知覚的立ち現れ—「見え」—は、同じ「物」への「思い」—現在知覚的に立ち現れていない部分の知覚の想像—を伴う。

物体の知覚に関する大森の「記述」は十分に啓発的であり、その正しさを擁護することには十分な意味がある⁴。また、(i)–(iii) という特徴づけはおおざっぱなものにすぎず、本当は、もっとずっと注意深い定式化が必要である。それは、(i)–(iii) よりもさらに無味乾燥で、きわめて人工的なものとなるだろうが、そうした定式化を大森の記述は十分に許すだろう。

だが、ここではそうした方向で進むのではなく、物体の知覚についての大森の記述が、記号の知覚について自然な仕方で拡張できることを示すことで、大森の記述の説得性を高めることを試みる。これまで私は、いくつかの論文⁵で、大森の知覚論を、物体の知覚から、記号の知覚へと拡張することを試みてきた。ここで再度そうするのは、以前の試みをただ繰り返すためではなく、哲学の場合にはよくあることだが、繰り返すことで新しく見えてくるものがあると期待してのことである。

4

「記号」ということで、ここでは主に、言われたり書かれたりする語（言葉）を取り上げたい。よって、ここで問題にする「記号の知覚」の典型的な例は、一方では、会話の中で発せられた「暑い」という言葉を聞くことであり、他方では、メールの中に出てくる「暑い」という言葉を見ることである。ひとつひとつの語あるいは言葉は、それに特有の音声あるいは書字上の特徴をもつだけでなく、意味をもつところでは考える。

後者の方が、物体の知覚との関連が付けやすいように見える。液晶画面で「暑い」という言葉を見るとき、われわれは何を見ているのか。それは、手にしているスマホ、あるいは、机の上のディスプレイという物体が、ある時点でもつ部分的特徴であると、言うて言えなくはない。たしかに、漢字もひらがなもあまり目にしたことがないひとにとっては、そうかもしれない。しかしながら、日本語の読み書きがふつうにできるひとにとって、見えているものは、物体が一時的にもつ部分的特徴などというものではない。そうした

⁴ まだまだ不十分なものではあるが、そうした試みとして、次を参照していただければ幸いである。飯田隆『虹と空の存在論』（二〇一九年、ぶねうま舎）一二三–一三二頁。

⁵ 飯田隆「哲学から見た言語」遊佐典昭（編）『言語と哲学・心理学』シリーズ朝倉 言語の可能性 9（二〇一〇年、朝倉書店）三九–六七頁、および、Takashi Iida, “Perceiving abstract objects: Inheriting Ohmori Shozo’s philosophy of perception”, in S. Watanabe (ed.), *Logic and Sensibility*. 2012, Keio University Press, pp. 239–254.

ひとに見えているのは、まさに「暑い」という言葉である。それは、液晶画面上にあるものではあるが、そのことは、ときには意識されないことさえある。

たしかに、手書きの文字の場合は、その文字を構成している点や線の形に注意が向かったり、それを書いたひとを思い出したり想像したりすることはある。音声として聞く言葉の場合に、同様のことはもっと頻繁に生じる。音声として現れる言葉は、合成された場合を除けば、特定のひとの声として聞かれるからである。よって、どのような言葉が発せられているのかにまったく注意を向けずに、それを発している声だけに、引き付けられたり、反発するということがありうる。

しかし、言葉と接するとき、われわれは常に、それを担っている声や文字に注意を払うわけではない。相手が「暑い」と言うのを聞いて、「このひとは暑がりなんだな」と思ったり、遠くに住んでいる知人からのメールに「暑い」とあるのを見て、「そうか、そっちは暑いんだな」と思ったりするとき、相手の声の特徴や、液晶上の文字の字体やサイズに、まったく頓着しないということは、むしろしょっちゅうのことだと言ってよいだろう。

こうした場合、われわれは何を聞いたり見たりしているのだろうか。その答えは、われわれは言葉、たとえば、「暑い」という言葉を聞いたり見たりしているというものだろう。たしかに、われわれが言葉を聞いたり見たりするのは、われわれが多くの場合とくに注意を払わない、特定の声や特定の文字を通じてのことである。だが、もしもここで知覚ということ可言えるのなら、そうした声や文字ではなく、言葉そのものをわれわれは知覚していると言いたくなるだろう。

ここで便利なのが、タイプとトークンという区別である。この区別はもともとパースが導入したものだが、現在の哲学や言語学での使われ方はパースが意図したものとは大きく違うらしい。パースの本来の区別を検討することは重要だと思うが、ここでは、記号に関して用いられる場合に現在一般に理解されている仕方でこの区別を使う。それによれば、「暑い」という言葉は、タイプとしてはひとつであるが、トークンとしては無数にありうる。「暑い」というタイプとして同一の言葉が、さまざまな時と場所で言われたり書かれたりするたびに、「暑い」の異なるトークンとして存在するからである。

タイプとトークンという用語を使えば、つい先ほど述べたことを次のように言い直すことができる。すなわち、「暑い」という言葉を聞いたり見たりするとき、われわれが直接知覚するのは、「暑い」という言葉の特定のトークンであるが、それは、タイプとしての「暑い」の知覚である、と。ここに、物体の知覚との並行関係を見ることはたやすい。ある物体を見るとき、われわれに直接見えるのは、その物体のある特定の部分であるが、それでも、われわれが見るのは、全体としてのその物体だからである。

タイプは、直接知覚されないだけでなく、特定の時空的位置を占めない抽象的存在と考えられることが多い。それゆえ、現象主義が、直接知覚されな

い物体を嫌って、知覚像の集合に物体を還元しようとしたように、タイプを、直接知覚でき、特定の時空的位置を占めるという意味で具体的でもあるトークンに、何らかの仕方で還元しようという考えが出てくる。

そうした還元を行うもっとも直截なやり方は、タイプをトークンの集合と同一であると考えることである。たとえば、「暑い」という言葉タイプは、そのありうるトークンの全体から成る集合であるとするのである。「ありうるトークン」としているのであるから、こうして決まる集合は無限集合となる。だが、ここで直ちに指摘されるのは、こうしたトークンを集めて集合を作ることは、それがタイプ「暑い」のトークンであるということと独立に行うのは不可能だということである。つまり、大森が「物と知覚」で、物言語と知覚像語とのあいだに成り立つと論じた (1) と (2) とパラレルに次が成り立つ。

- (1') タイプについての話は、トークンについての話にはほかならない。よって、タイプはトークンに「還元」できる。
- (2') しかし、タイプについて話すためには、トークンの無限集合を語らねばならず、そのためにはタイプが不可欠である。よって、タイプの概念は消去不可能である。

物の場合には、知覚像を消去する必要があったのに対して、トークンの概念には、「表象」を導入するような危険はなさそうである。したがって、これで満足してもよいのだが、せっかくだから、「ことだま論」以降の枠組みの中で、物体の知覚と記号の知覚のあいだの並行性がどうなるかを追求してみよう。そうすることは、(1') と (2') からだけでは得られない、記号の知覚のもつ構造についての知見を与えてくれるはずである。

5

3節で三点にわたってまとめた、物体の知覚についての大森の記述を、記号の知覚にあてはめてみよう。

- (i') 記号タイプの知覚は常にある特定のトークンを通じてのものである。よって、時点 t においてタイプ T を知覚するとき、そのときに知覚されているトークンと、知覚されていないトークンの両方がありうる。 t において知覚されている T のトークンを「 t における T の見え」と呼ぶ。
- (ii') t において知覚されていない T のトークンは、 t で「思われ」ている。 t において知覚されていない T のトークンの思いを伴わなければ、 t における T の知覚は成立しない。「見え」は常に「思い」を伴う。

(iii') tにおけるタイプTの知覚に伴われる「思い」は、「知覚的
思い」である。すなわち、tにおいて知覚されていないTの
トークンの知覚の想像である。

哲学の議論に慣れているひとならば、これを見てまず (i') の二つ目の文の
最初にある「よって」に引っかかるだろう。この「よって」はどんな推論を
表しているのかと、そういうひとならば聞かざる。物体の知覚の場合の (i)
の同様の場所にある「よって」がどういう推論を表しているかは明瞭である。
物体の知覚がある特定の視点からのものであり、物体が三次元であるゆえに、
物体のそのときに知覚されている部分と知覚されていない部分の両方がある
という推論である。(i) で明示されずにいた物体の三次元性のような前提が、
(i') にもあると考えれば、そこでの「よって」は正当化されると私は考える。

記号のもつ重要な特徴は、使い手の観点からは、繰り返し使えるということ
であり、受け取り手の観点からは、繰り返し現れるということである。タイ
プとトークンの言葉でこれは、同一のタイプが複数の異なるトークンを持
ちうるということである。ただひとつのトークンしかもちえないタイプとい
うものは存在しない。これは、物体がさまざまな表面をもつ三次元の存在で
あることと類比的である。したがって、タイプの知覚がある特定のトークン
を通じてのものであり、タイプが繰り返し現れることのできる存在であるゆ
えに、現在知覚されているトークン以外の同じタイプの別のトークンがあり
うるのではなくてはならない⁶。

(ii') に移ろう。「暑い」という言葉のトークンが、単なる物理的音や液晶上
の光のパターンとしてではなく、まさに「暑い」のトークンとして認識され
るのは、それが、繰り返し現れることのできるタイプ「暑い」のさまざまな
トークンのうちのひとつであるとみなされるからである。そう思うためには、
現在知覚しているトークン以外の、「暑い」のトークンが「思われ」ているの
でなくてはならない。物体の知覚について大森が机を例にして述べていると
ころ⁷を、「暑い」という言葉の知覚に転用すれば次のように言えよう。

もしいま知覚されていないトークンの知覚的思いから切り離され
分離されたならば、今聞こえたり見えていたりするトークンはタイ
プ「暑い」のトークンではありえない。一言で言うならば、こ
れら他のトークンの知覚的思いがこもっているからこそそのトー
クンは「暑い」のトークンなのである。

そして、物体の知覚の場合と同様、他のトークンの知覚的思いにおいては、
そのトークンの知覚の想像だけでなく、知覚していると想像されているトー

⁶(i') についてもう一点補足しておく。物体の知覚の場合、視点（パースペクティブ）は知覚
ごとにただひとつだが、タイプの知覚の場合には、同一のタイプの複数のトークンを同時に知覚
することがありうる。その場合は、知覚されている複数のトークンが、tにおけるタイプの見え
である。そして、これらのトークンのどれとも異なるトークンが「思われ」ることになる。

⁷『著作集 第四巻』二三五頁六行目から八行目。

クン以外のトークンの知覚の想像も、いわば入れ子式に含まれているはずである⁸。

物体の場合との違いがもっともはっきり現れるのは、(iii')に関してだろう。物体の場合、想像されるべきなのは、現実の知覚がなされているその時点 t での物体の、知覚されていない部分の知覚であった。それに対して、記号タイプの場合、現実を知覚されているトークンとは異なるトークンの知覚を想像するので十分である。よって、この想像が反事実的である必要はない。想像されるトークンが、現実の知覚が生じている時点 t において、現実の知覚が及ばないような場所に存在していると考え理由はないからである。なぜならば、物体の場合、 t において知覚されていない部分が存在することが必然的であるのに対して、トークンが知覚されている時点において同じタイプの別のトークンが存在することは必然的でないからである。

これまでの記述では触れなかったが、物体の知覚は瞬間的なものではないゆえに、知覚の前後におけるその物体の「見え」の「思い」もまた、物体の知覚の成立のためには欠かせない。したがって、時点 t における物体の知覚には、 t における物体の見えていない部分の知覚の想像に加えて、 t 前後における物体の知覚の想像も伴われている。それに対して、時点 t におけるタイプの、その特定のトークンを通じての知覚が伴っているはずの、別のトークンの知覚の想像にとって、想像されたトークンはいつのものでもよく、また、どこにあるものであってもよい。

物体と記号とのあいだのこうした違いは、物体が三次元の持続する存在であるのに対して、タイプとしての記号は時空の中に位置をもたない抽象的存在であるからだろうか。必ずしもそうではないと私は考える。というのは、トークンのみならずタイプもまた時空的存在者であると論じることができるからである⁹。しかし、ここでその議論を繰り返すのはやめよう。それよりも緊急な問題がある。

6

それは、「記号タイプ」を「普遍者」、「トークン」を普遍者の「具体事例」と読み替えれば、(i')–(iii')が成り立つゆえに、(i')–(iii')だけでは、タイプとトークンの十分な特徴づけになっていないという反論がありうることである。ピンクという色は普遍者であると考えよう。これの具体事例は自然のものでも人工のものでもたくさんある。普遍者ピンクの知覚ということが言えるとすれば、それは、その具体事例を通じてのみ知覚されると考えられるだろう。庭に咲いているナデシコを見て、それを普遍者ピンクの具体事例として見る

⁸こうした想定が無限背進に導くものでないことについては、『虹と空の存在論』一二七頁以下を参照されたい。

⁹次を参照されたい。Takashi Iida, “On the concept of a token generator” *Annals of the Japan Association for Philosophy of Science* 21 (2013) 37–55.

ということは、そのとき見えているナデシコ以外のピンクの具体事例の知覚の想像という「思い」が伴っていることが必要かつ十分ではないだろうか。

たしかに、ナデシコをただ庭に咲いている花と見るのではなく、普遍者ピンクの事例として見るためには、こうした「思い」を伴った知覚が必要だろう。また、タイプとトークンの区別が、普遍者とその具体事例という意味で使われているのを耳にすることも多い。たとえば、こころの哲学での「タイプ」や「トークン」の使われ方は、普遍者とその事例という一般的な意味で使われていると考えなければ了解不可能であることが多い。「タイプとトークン」のこうした拡大解釈はやめた方がよいと私は考える。だが、なぜこれが拡大解釈なのかと逆に反論されるだろう。普遍者とその具体事例という区別と、タイプとトークンという区別とのあいだに、はっきりとした違いがあるのかというわけである。

言葉の場合が典型的だが、トークンの認識は、それが属しているタイプの認識と切り離すことができない。どういうタイプのトークンであるかを知らなければ、そもそもそれが何であるかもわからない。これは、物体の知覚の場合の、物体の「見え」と同じである。見えは常にそれが何の見えであるかがわからなければ、それとして認識することはできない。物体の知覚の場合、「見え」がそれ自体で存在しているわけではない。そのように考えることは、知覚像のような表象の存在を認めることである。それに対して、言葉のトークンは、音声のような物理的出来事や液晶画面という物体の一部の状態といった形で実現されるので、そうした存在としてそれ自体で存在すると思われやすい。しかし、言葉のトークンは決してそうした出来事や状態と同じではない。タイプとの関連を失った物理的出来事や状態は、もはや別の存在者である。普遍者の具体事例とみなされる存在者は、この点でまったく異なる。庭に咲いているナデシコは、それがピンクの具体事例とみなされなくとも、また、種ナデシコの具体事例とみなされなくとも、それ自体で存在するからである¹⁰。

でも、それでは、トークンが、何か神秘的な存在者になってしまわないだろうか。何が、出来事や物体を、あるタイプのトークンにするのか。タイプはどのようにして、こうした出来事や物体に宿るのだろうか。その答えはじつは簡単である。人間の意図が、出来事や物体を、あるタイプのトークンとするのである。トークンとはすべて、人間によって意図的に産出されるか、あるいは、既存のものが利用されることによって存在するものである。こうした単純な解答を妨げてきたのは、タイプとトークンの区別を不当に拡張解釈する傾向のせいである。この区別は、言語的記号のような人為的に作られたものに限るべきである。

さて、それでは、(i')-(iii') が、記号の知覚についての説明として十分ではないというもっともな批判に対しては、どう答えるべきだろうか。新しく条

¹⁰ よって、しばしばなされるように、生物種とそれに属する個体との関係は、タイプとトークンの関係だとみなすべきではない。

件を加えるというのも手だろうが、ここでは別の方法を提案したい。それは、この三つの条件に先立って、トークンとは何であるかについて、いま行ったような説明をしておくことである。それは、物体の知覚の場合に、物体の「見え」とは何であるかの説明が本当は必要だったことと平行である。

物体の知覚と記号の知覚とのあいだの並行関係は、「物体」の概念がわれわれの認識にとってアプリアリであったのと同様に、言葉を使う存在者であるわれわれにとって、「タイプ」の概念もまたアプリアリであることを示唆していないだろうか。